

第1章 物流・ロジスティクスとは何か

言うまでもなく、輸送という役割を担う機関は鉄道のみに限られない。また、輸送はそれ自体で完結した作業ではなく、モノが市場を移動してゆく過程の一部として捉える方が自然である。本研究において鉄道貨物輸送に関する考察を行う上での前提知識として、この章では、一般的なモノの流通を俯瞰する概念である「物流」と「ロジスティクス」のごく簡単な説明を試みる。

1. 物流とは

物流とは一般に物的流通の略であり¹、physical distribution に由来する。生産者から消費者まで至るモノの移動を指し、その際に必要となる包装、輸送、保管、荷役および情報などの諸活動を包括する概念である。生産者から最終需要者への最も大きな移動だけではなく、原材料生産地から工場へ、ある工場から別な工場へ、工場から販売店舗へ、そして店舗から消費者へ至る移動の各々すべてが物流であるといつて差し支えないだろう。各物流は、流通過程全体の中での性格付けにより、材料・部品や販売物品を工場や販売企業に運び込む「調達物流」、販売企業から一般市民への移動である「販売物流」、社内輸送・社内保管を示す「社内物流」、商品を受け取った側から販売元に戻す「返品物流」などに分類できる。

2. 経済的背景の変化

物流という言葉が公に用いられるようになったのは、高度経済成長期のさなかであったとされる。この時期に見受けられた小品種大量生産の風潮が、時代を経て多品種少量生産志向へと変わり、それにともない小回り輸送のニーズに対応しなくてはならなくなった。当然のことながら、少量をあちこちへ高頻度で運ぶ小回り輸送を行えば、人件費をはじめ費用が増大する。かさむ費用をいかに圧縮するかは経営上の大きな課題であるので、物流の効率化が要求されることとなる。

また、そもそも少品種大量生産から多品種少量生産への流れ自体が、サブライサイド(事業者)重視からダイヤモンドサイド(顧客)重視への変遷の表れの

¹ 物流の語源を「物質流動」あるいは「モノの流れ」とする説も存在するが、「物的流通」が最も一般的である。

ひとつであると見ることもできる。仮に製造機械に対する投資が功を奏し、依然に比して安価で大量に生産活動を行うことができるようになったとしても、その生産量に見合うだけの消費者の需要がなければ適切な投資であったとは評価できない。前段落のような輸送にまつわる費用という観点に限らずとも、ディマンドサイドのニーズを重視する姿勢のもとでは、生産者から消費者に至るまでの一貫した最適化・効率化が必要となってくる。

3. ロジスティクスとは

そこで注目されるのが、ロジスティクスの概念である。logistics(仏)とはもともと軍事用語で、「兵站」と訳される。戦場の後方から必要物資・情報などを前線へと補給することを指しているが、補給やそれに伴う業務を無視してやみくもに前へ進んでしまえば物資や本部からの連絡が途絶え、不利な状況に陥ってしまう。このことから転じ、ロジスティクスという語は、「市場のニーズやタイミングに合わせた確に資材調達・生産・配送を行う、無駄のない企業の戦略的経営システム」を示すビジネス用語となった。

「配送部門だけ考える」「保管面にのみ着目する」といった部分的な最適化アプローチではなく、全体での最適化を目指すトータルな思考がロジスティクスの最大の特徴である。例えば「輸送費はアップするがそれ以上に生産コストが下がるので海外生産を行う」ことは、ある部門での費用の増加と他部門での成果とのバランスをはかる考え方の典型だといえる。

ロジスティクスのもう1つの特徴として、最終的な成果を重視する「成果志向」が挙げられる。この点が、費用の削減を最重要視してきた従来の物流管理とは大きく異なる。ロジスティクスは、単に全体的コストを最小化するのみではなく、サービスの質(需要への対応)という基準とコストとの兼ね合いを考慮した上で、最も望ましい選択肢を採用する理論だといえよう。

今日では日々発展をとげるコンピュータ・ネットワークの技術を駆使し、データの裏付けのもと、流通過程の一部のみの効率化にとらわれずに、また直接的な費用削減のみに目を奪われずに、最適化を図るのである。